

## 十七世紀竹島漁業史のために

池 内 敏

### はじめに

現在、日本と韓国とのあいだで係争となっている竹島（韓国名は独島）の歴史研究とりわけ十七世紀のそれは、かつては川上健三『竹島の歴史地理学的研究』（古今書院、一九六六年）の独壇場であった。それは、十七世紀初頭に鬱陵島（当時はこの島を竹島と呼んだ）への渡航許可を幕府から得た鳥取藩領米子町人大谷家に伝来する史料群を、川上だけが利用できたからであった。外務省の調査官として大谷家の史料群をひとつひとつ点検できた川上は、それらのなかから「竹島が日本領である」ことを論証するに資する史料だけを抽出し、ひとつの筋道を立てた。それはおよそ以下のようなものである。

元和四年（一六一八）に米子町人大谷・村川両家は、旗本阿倍家の取り持ちによって竹島（鬱陵島）渡海免許を幕府から得て、竹島（鬱陵島）での収益を排他的に独占するようになった。米子から隠岐島後を経て竹島（鬱陵島）へ渡航するに際し、その航路上にあたる竹島（当時はこの島を松島と呼んだ）についても十七

世紀半ばに幕府から渡海免許を得ることとなった（松島渡海免許）。その後、竹島（鬱陵島）と松島（現在の竹島）両島からの収益を大谷・村川両家で折半するように経営方式が変わりつつも、十七世紀末に竹島（鬱陵島）で朝鮮人漁民と競合する事件が生じるまでは、これら島々における独占的経営を継続した。朝鮮人漁民との競合事件は、やがて幕府の裁断により、幕府が竹島（鬱陵島）を朝鮮領と確認して日本人の渡航禁止を命じる（元禄九年（一六九六）正月、元禄竹島渡海禁令）こととなり、ここに大谷・村川両家による竹島（鬱陵島）渡海の歴史は幕を下ろすこととなった。ただし、元禄竹島渡海禁令の文面には竹島（鬱陵島）への渡海を禁止するとのみ書かれたから松島（現在の竹島）への日本人渡航が無くならなかった可能性があると川上は論じた。

この川上によって作られた筋道は竹島問題に関わる一九五〇～六〇年代の日本外務省の原則的立場の骨格を形作り、現在の日本外務省の場合は松島渡海免許には言及しないものの、やはり大筋は川上の論証に依拠したままである。すなわち、元和四年（一六一八）竹島（鬱陵島）渡海免許の発給を機に、米子から竹島（鬱

陵島)への航海途上にある松島(竹島)の利活用が始まって日本領となり、元禄竹島禁令によっても日本人の松島(竹島)利用は否定されず、一九〇五年一月における竹島日本領編入の閣議決定でそうした近世の領有が再確認された、という。

本稿の筆者は、すでに江戸時代における竹島(当時の松島)をめぐる歴史について何度か論じており、竹島渡海免許の発給は元和四年ではなくて寛永初年であること、松島渡海免許は存在しないこと、元禄竹島渡海禁令は「竹島・松島両島渡海禁制」であると幕府および大谷家によって理解されており、元禄竹島渡海禁令の後には引き続き竹島(当時の松島)を利活用していたことはありえなかったこと等を具体的に史実をもとに論証してきた<sup>(1)</sup>。しかしながら、筆者は大谷家の史料を点検できたわけではなく、川上が翻刻提示した史料や大谷家のご子孫によって編纂された大谷家文書目録(大谷文子『大谷家古文書』、私家版、一九八四年)に見える史料内容の要約等々を最大限活用しての論証であった。

ところが、筆者は二〇一四年二月に鳥取県史編纂事業の一環として大谷家文書の原文書をすべて実地に拝見する機会に恵まれた。それは、筆者自身の論証を再点検する契機ともなったが、同時に図らずも川上健三『竹島の歴史地理学的研究』が史料の恣意的な取捨選択の産物であることにも気づかされた。大谷家文書のなかには「竹島が日本領である」ことを論証するには不都合な史料もまた少なからず含まれており、川上がそれら不都合な史料を

目にしたことが確実であるにもかかわらず、『竹島の歴史地理学的研究』のなかではそれら史料を一切無視していたことがはつきりと了解された<sup>(2)</sup>。

本稿は、こうした近世竹島をめぐる歴史研究の現況を踏まえて以下のようなことを行おうとするものである。第一に、大谷家文書のうち従来利用されてこなかった未紹介・未翻刻史料を紹介する。第二に従来利用されつつも部分利用・部分翻刻・部分紹介しかなされなかったものや、紹介されながらも原本校合ができなかったために翻刻文の点検が不十分だったものについて原本に立ち返りながら史料翻刻文の提示を行う。こうした史料群の翻刻紹介を行いながら、史実の再検討に至ることができればと考えるものである。

## 一 十七世紀半ばにおける竹島の利用

### (1) 松島渡海事業の始まり

これまで、史料上における竹島渡海の初見と考えられてきた次の「史料1」から検討したい。

「史料1」 承応元々明暦元年(一六五二〜五五)または万治二年(一六五九)以後

尚々©当地瀏節様・大和様へも嶋之義申上候、④御同名九

右衛門殿へ別紙ニ可進候へ共、御手前様より左之通御心得頼申候、以上

貴札致拝見候、先以其地御無事御座候而大慶ニ奉存候、此地も別条無之候、先度者<sup>①</sup>与風罷越候処ニ、種々御懇意殊ニ再三御振舞可被成候間、毎度之御心入不浅忝存候、御内山下ニも御理り申何も様へも伺候不申候ニ付御残多帰宅仕候、随而<sup>②</sup>松嶋へ七八拾石之小舟遣、鉄砲ニ而ミち打申候ハ、小嶋之事ニ候間、竹嶋江ミちにけさり、竹島之納所大分候ハンと市兵衛望被申候、<sup>③</sup>大義存候へ共連彦左衛門てつたひ申上者、市兵衛心次第と存、以来之心みさもあるへき事かと存、江戸安部四郎五郎様へ御内証申上ル飛脚進上申候、調可申も不存候、猶追而可得其意候、恐惶謹言、

極月五日

道喜様 御報  
石井宗悦 常(花押)  
(大谷家古文書一—一〇)

この史料については、既に田村達也による年代比定がなされている。<sup>④</sup>それは、史料中に見える瀏節様、大和様、御同名九右衛門殿、御手前様(宛先の道喜様と同一人物)、彦左衛門、市兵衛、石井宗悦(差出)の生没年(および瀏節、道喜といった号の名乗りの時期)の比較検討によるものである。その要点は、鳥取藩米子家老荒尾成利が隠居して瀏節を名乗るのが承応元年(一六五

二)で没するのが明暦元年(一六五五)十月、また荒尾成直が荒尾大和から荒尾但馬へと名乗りを改めるのが明暦元年三月である点に注意すれば、この史料は承応元年から明暦元年のあいだのものと確定される。ただし、そうなると、御同名九右衛門(大谷九右衛門)、道喜(大谷道喜)との関係をどう考えるかが問題となる。大谷惣助が江戸で元服して九右衛門を名乗り始めるのは万治二年(一六五九)五月のことであり、それにもなつて惣助の父九右衛門が隠居して道喜を名乗ることとなつた、とする通説的理解がある。文中に道喜・九右衛門ふたりの名前が現れる点からすると代替わり後のことと考えざるを得ないから、その点を重視すると「史料一」は万治二年以後となり、先ほどの年代比定の結果とは四〇七年ほどの違いが出てくる。田村は、当史料を承応元年から明暦元年のあいだのものとし、代替わり前から先代九右衛門が道喜号を名乗っていたと見る。そうなると史料中には道喜とは別に九右衛門を名乗る者が併記されるのだから、元服前の者が既に家名(九右衛門)を名乗っていたこととなる。これはいささか落ち着かない。<sup>⑤</sup>

いったん年代比定を保留しつつ先に内容を見てみよう。

本文冒頭部分では、鳥取藩領青谷町の商家石井宗悦が米子町に大谷家を訪問し振舞いを受けた謝辞が述べられる。次いで宗悦は、大谷家とともに竹島(鬱陵島)渡海事業を行っていた村川市兵衛から松島(今日の竹島)の活用方法について提案を受けたこ

とを記す。

松島（今日の竹島）へ七〇石積の小船を遣り、そこに集まっている「ミチ」（アシカ）を鉄砲で脅せば、松島は小島なのでアシカは竹島（鬱陵島）の方へ逃げ去るだろう。そうすれば、竹島（鬱陵島）でのアシカ漁は収獲が増えるに違いない、という計画である（a）。そうした作業は苦勞の多いものだろうから石井宗悦家に仕える彦左衛門に手伝わせようと申し出たところ、市兵衛は、手伝う手伝わないは石井家の意向次第だが、この先そのようにしてくれるものならばと考えて、先の計画について阿倍四郎五郎へ内々で意向を問うてみるという。そうした計画が実現するかどうかは分からないが、と宗悦は道喜に言う（b）。

追記部分では、そうした松島の件については鳥取藩米子家老（荒尾成利・成直）へ伝えてみる（伝えてみた）（c）。大谷家当主の九右衛門へも同内容を別途伝えるつもりだが、道喜の方でもあらかじめ心得ておいてほしいともいう（d）。

松島（今日の竹島）の活用について村川市兵衛が先に具体策を練っており、石井家はその計画に参与する意思を示していること、その計画の可否を江戸の旗本阿部四郎五郎に問い合わせ、また鳥取藩米子家老にも報せていること、こうしたことが「史料1」から明らかとなる。そして年代比定の如何を問わず、計画が荒尾成利・成直に伝えられた（伝えられる）とある以上は、村川市兵衛による松島利活用計画は承応元年〜明暦元年ころ（一六五

二〜五五）には既に存在していたことも確実である。その一方で、この史料による限りは、松島利活用計画に対する大谷家側の意向は分からない。

次に示す「史料2」〜「史料5」については、川上健三と本稿筆者によって年代比定が済んでいる。

#### 「史料2」 万治元年（一六五八）

尚々b去年市兵衛過分之損仕由候、i先村川舟渡海、貴様重而之番を遣し可然候、其内貴様御越候ハ、御直委可承候、已上

七月十五日村川市兵衛方御越候御状拝見、殊更鞋踏皮三足贈給忝候、先以道喜老初各様御無事之由目出珍重存候、此表無相替儀四郎五郎無為、拙者躰も無異儀罷在候、可御心安候、如承意春中は久々御在江戸候へ共為差御馳走も不仕、今更残多候、将又c竹嶋渡海筋松嶋への小舟之儀被仰越候、今度市兵衛方ニ様子具承候、f去年市兵衛舟出候、着舟不申大分之損仕候由候、於然ハ先市兵衛舟遣し貴様ハ重而之番を渡海可然候、其節御越候ハ、御直委可承候、当年御当地永々御入候へ共何之沙汰も不被仰聞候や、g筆談にてハ委細承知も不罷成候、其上市兵衛被申分とは貴様書面少相違成儀も御座候、市兵衛口上ニ可有物語候、猶期面談可得御意候、恐惶謹言

九月七日

亀山庄左衛門（花押）

大屋九右衛門様 御報

(大谷家古文書二一三三／「阿倍一門」四五)<sup>(5)</sup>

〔史料3〕万治二年(一六五九)<sup>(6)</sup>

尚々道中無為在所へ被相着候哉無心元候、以上

去十一日大坂より示預披見、如承意去比首尾能御目見江相濟恐悅之旨尤存候、大坂迄無異儀被罷越之由目出珍重候、然者①竹嶋近辺松嶋江渡海之儀被申越令得其意候、村川市兵衛方相談被仕如類年渡海可然と存候、将又我等一紋無恙在之事候、尚期後音候、恐々謹言

六月廿一日

阿倍四郎五郎 政繼(花押)<sup>(7)</sup>

大屋九右衛門様 御返事

(大谷家古文書二一五／「阿倍一門」三)

〔史料4〕万治二年(一六五九)

尚々①市兵衛と御相談、類年仕来候様ニ被成可然、竹嶋之儀ハ貴様と市兵衛殿と御兩人御指引被成候間、能様ニ御相談可然候、以上

去十一日大坂より貴札拝見、殊更扇子五本入沓箱被懸御意忝存候、貴様儀弥御無為御越候由目出度珍重候、四郎五郎一門無事、拙者式も無恙罷達候間可安御心候、然者②竹嶋近所松嶋渡舟之儀被仰越候、四郎五郎申聞候、村川市兵衛方と相談、類年

十七世紀竹島漁業史のために(池内)

仕来候様被成可然旨候、猶期面上之時候、恐惶謹言、

六月廿二日

龜山庄左衛門(花押)

大屋九右衛門様

(大谷家古文書二一三三／「阿倍一門」三五)

〔史料5〕万治二年(一六五九)

村川市兵衛方へ遣ス書状之写

尚々③去々年村川大分之損被仕候由候間、大屋渡海沓番用捨、来ル丑之番より大屋殿御渡し可然候半哉、能様御相談可被成候、以上

大屋九右衛門被罷越候間一筆令啓上候、夏中御越候へ共何之御馳走も不申今更御残多存候、道中無異儀御越弥御在宅候哉無心元候、此表別条無之、且那一紋無事、拙者躰も無恙候間可安御心候、然者④竹嶋近所之小嶋へ小船渡海之儀、去年貴殿被仰せ候ハ、大屋九右衛門方ハ同心無之候間、貴様斗にて可遣哉と被申候間、⑤其節我等申候ハ当分同心無之候ても重而所務も有之候、大屋も渡度と被申にて可有之候、口上にてハ無同心と申分ハ実儀共不被存候、其内ハ貴様斗御渡し可被成哉と申置候、⑥今度九右衛門殿被參被申候ハ市兵衛同意ニ小船渡海仕度旨候、⑦拙者挨拶仕候ハ、尤左様可有之と存候、去々年村川大分之損仕候由候、因茲先來年も村川船遣し大屋渡番来ル丑寅兩年より九右方渡し、夫より如例兩人にて順々ニ御渡し可然候、⑧彼嶋者草



木も無御座少し之所、別之所務無之みち油取申一種之由候、於然者互事六ヶ敷無之様御談合可被成候、恐惶謹言

右之通村川市兵衛方へ申遣候、為念案書懸御目候、以上

九月八日

亀山庄左衛門 ■ (花押)

大屋道喜様

(大谷家古文書二二五／「阿倍一門」四六)

「史料2」によれば、松島(今日の竹島)へ小船を派遣したいとする大谷家の意向が旗本阿部家の家臣亀山庄屋左衛門に伝えられ、亀山は村川市兵衛と相談を行った(㉔)。去年＝明暦三年(一六五七)には村川市兵衛が松島渡海を行ったが着船できず、大きな損失を出した。それでまずは市兵衛の松島渡海を優先し、大谷家の松島渡海はその次のときにするのが良いと亀山は大谷九右衛門に伝える(㉕)。同じ趣旨は追記(㉖㉗)でも繰り返し返されて念押しされる。また、亀山から大谷九右衛門に対し、こうした相談事が手紙の往復でなされていると細かな調整ができないこと、書面で見える限りは村川家と大谷家のあいだでは松島渡海に対する温度差があること、市兵衛と面談すべきことが示される(㉘)。

ところで「史料2」㉘にみえる村川家・大谷家の温度差は「史料5」に具体的に示される。万治元年に村川市兵衛が亀山庄左衛門に語った(「史料2」㉙に該当するか)ところによると、松島

への渡海事業については大谷家が同意しないので村川家単独で行いたい(㉙)という。亀山はこれに対し、大谷家も当分は同意しないにしても、いずれそのうち松島渡海をしたいと望むだろうか、それまでは村川家単独で渡海すれば良い(㉚)と返答した。それが万治二年になって大谷家の方から松島渡海をしたいとの申し出があった(㉛)ので、亀山からは、去々年＝明暦三年(一六五七)には村川市兵衛が松島渡海で大きな損失を出したので、来年は村川が松島渡海を行い、大谷は次の丑寅両年から渡海を始め、そののちは大谷・村川両家が順番で交代に渡海をしてはどうか(㉜)と伝えたという。

次の「史料6」は未紹介・未翻刻史料だが、日付・内容からすれば「史料5」と同時に大谷道喜に宛てられた書状であろう。おそらくは同年七月二五日付大谷道喜書状には大谷家も松島渡海を行いたい希望が記されていたであろう。その上で江戸の阿部家を訪れた大谷九右衛門も口頭でそうした希望を述べた。しかしそれらは「道喜・九右衛門父子の御油断」であると亀山は厳しく批判する(㉝㉞)。「油断」とは、村川が提案し実行してきた松島渡海に対して、大谷家がなかなか同意しなかったことを落ち度だと批判するものである。しかしそうではあっても亀山(阿部家)としては精一杯周旋しようという(㉟㊱)。だから、今後は村川家と都合良く相談を行って松島渡海を行うようにと誘うのである。

〔史料6〕万治二年（一六五九）

尚々④貴様・九右衛門殿御油断之通九右衛門殿申候、具申達候、然共拙者随分肝煎申候、左様ニ御心得可被成候、以來九右衛門殿御息御越し可被成候由可得御意候と存候事候、以上

七月廿五日貴札忝拝見、殊下緒一具被懸御意過分不浅候、先以貴老様御無為御座候而目出珍重不過と存候、我等儀も無恙罷在候間可被安御心候、⑤今度御同名九右衛門殿御御越、小舟渡海之儀被仰聞候、右之段々口上ニ具申達候、貴様御父子御油断と存事候、然共①村川市兵衛方へ書状越申候、能様ニ御相談可被成候、猶期後音候、恐惶謹言

九月八日

龜山庄左衛門（花押）

大屋道喜様 御報

（大谷家古文書二二四／「阿倍一門」四四）

以上を時系列で再整理しよう。明暦元年（一六五五）ころまでには村川市兵衛は松島渡海を計画し、同三年には実行に移しつつも失敗に終わって大きな損失を出していた。これに対して大谷家は初め松島渡海には加わらなかったものの、万治元年（一六五八）と二年、連年で阿部家に対して松島渡海を希望する旨を伝えてきた。これに対して万治二年六月段階での阿倍家側は、村川市兵衛と相談をして、これまでの竹島（鬱陵島）渡海と同様に隔年

十七世紀竹島漁業史のために（池内）

交代で行うのが良からうと助言した（〔史料3〕①・〔史料4〕②）。それが同年九月になると、まずは村川家を優先したうえで、次の丑年から大谷家が松島渡海をするようにと指示が具体化する（〔史料5〕③）。ここにいる丑年とは寛文元年（一六六一）に当たる。その松島（今日の竹島）は「草木もない小さな島」で取り立てての収益も見込めない「みち油（アシカ油）だけ」の島だが、それだけに村川・大谷両家で互いに問題を生じないようにきちんと話し合いをして渡海事業を進めるのが良いともいう（〔史料5〕④）。

さて、大谷家にとつての最初の松島渡海事業へ向けて阿倍家と大谷家のあいだで書面が繰り返しやり取りされる様子が「史料7」～「史料11」に示されており、「史料7」⑤、「史料8」⑥、「史料10」⑦、「史料11」⑧⑨は、いずれも大谷家の松島渡海が来年（丑年＝寛文元年（一六六一））から始まることを述べる。これらのうち「史料9」「史料10」は未翻刻・未紹介史料だが、内容からみて当該時期の一連の史料である。また、「史料7」「史料8」「史料11」は、川上健三と本稿筆者によって年代比定が済んでいる。また、これら一連の史料のうち「史料8」⑥にみえる「先年四郎五郎御老中様へ得御内意申候」なる文言は、これまで「松島渡海免許」なり「幕府の公認・許諾」なりの根拠として再々取り上げられてきた。松島（今日の竹島）への渡海には幕府の公認があったと述べたいのである。これらの史料解釈が全く成

り立たないことについては、本稿筆者が繰り返し述べてきたところである。大谷家文書に現れる「老中の内意」なる文言からそうした解釈をすることはあり得ないことは章を改めて後述したい。

〔史料7〕万治三年（一六六〇）

尚々亡父四郎五郎我等へ両通之紙面令披見得其意候、遠路御飛札過分之至候、近日村川市兵衛可被致当着候間、其節可申述候、已上

過八日之御飛札到来、殊下緒耆具贈給過分之至候、其元相替儀無之無事之旨令祝着候、亡父四郎五郎方へ預御音札令承知候、去三月相果我等共悲歎申事候、㉔来年御手前舟竹嶋へ渡海、松島へも初而舟可被指越之旨村川市兵衛と被致相談尤二候、委細者家来龜山庄左衛門方へ可申達候間不能詳候、恐々謹言

九月四日

阿倍權八郎 政重（花押）

大屋九右衛門様 御返事

（大谷家古文書二一三五／「阿倍一門」二〇）

〔史料8〕万治三年（一六六〇）

猶以村川市兵衛殿近日御当地へ御参府可被成候由被仰越候、左候ハ、渡海之儀直段二可承候、市兵衛被帰候時分委細可申入候、先年相渡候証文二具可有御座候間、今以其通二舟御渡し可被成候、御仕合能可有之と存事候、追而御吉

左右可承候、已上

八月八日之御飛札拝見、先以貴様御無事之由目出珍重二存候、然者四郎五郎儀去三月上旬方煩出仕、同月十六日二相果被申候、各様も久々之御知人二候間可為御迷惑と察入候、跡式之儀ハ存生之内末之弟權八郎致養子、公儀相済候間可安御心候、病中二も御老中様各御見廻被成色々御懇被遊外実難有四郎五郎被存候、權八郎儀今以四郎五郎同前二御老中様御懇御座候間可安御心候、御用之儀も御座候ハ、四郎五郎同前三可被仰越候、少も如在申間敷候、将又㉔来年方竹嶋之内松嶋へ貴様舟御渡之筈二御座候旨、先年四郎五郎御老中様へ得御内意申候、渡海之番年相定、市兵衛殿・貴様へ証文相渡置候間、村川殿と御相談候而、其証文次第二可被成候、市兵衛殿も貴様も其証文之通少しも御違背者有之間敷儀と存候、猶期後音之時候、恐惶謹言

九月五日

龜山庄左衛門 ■■（花押）

大屋九右衛門様 御報

（大谷家古文書二一三四／「阿倍一門」三二）

〔史料9〕万治三年（一六六〇）

尚々来年舟可被相渡之旨尤候、委細者庄左衛門方へ可申達候、以上

一筆令啓達候、家来龜山庄左衛門方迄被入御念御状殊二長崎足袋廿足入忝箱贈給欣然之至候、何も村川市兵衛帰宅之刻可申宣



候、恐々謹言

十月十八日

阿部権八郎 政重（花押）

大屋九右衛門様 人々御中

（大谷家古文書二一五／「阿倍一門」一七）

〔史料10〕万治三年（一六六〇）

尚々遠国両度御飛脚被下別而く忝奉存候、両嶋御舟帰朝御仕合能候へかしと奉存候、来年御出御目見へ可被成候事候、其節可得御意候、以上、

又候哉、此度も飛脚被遣、殊更権八郎方へ長崎足袋廿足、拙者方へも同足袋拾足被掛御意忝奉存候、

一⑧来年者貴様竹島之内松嶋へ御船御渡し被成付当年方御支度之旨尤存候、今度村川市兵衛殿御当地へ被参候間則其段申談候、御仕合能御舟帰朝之節貴様御当地へ御越可被成御目見へ候、来春杯御出は必無用候、

一御不例付市兵衛御目見へいまた相済不申候、永々御逗留付彼仁被致難儀候、権八郎随分被入情候へとも御不例付延引仕候、

一思召寄両度迄御飛脚被遣別而御心入と被存候、御参府之節面談ニ御礼可被申候へとも我等方懇ニ御礼申入候様ニとの事候、我等儀も弥息災奉公仕候、可安御心候事候、面上ニと申残候、恐惶謹言

十七世紀竹島漁業史のために（池内）

十月十八日

龜山庄左衛門 ■■■（花押）

大屋九右衛門様

御報

（大谷家古文書二一三六／「阿倍一門」四三）

〔史料11〕万治三年（一六六〇）

村川市兵衛殿昨十五日首尾能御目見相調被罷帰候ニ付一筆令啓候、此表別条無之権八郎堅固被罷在候、我等儀も無恙罷達候間可安御心候、先以先日之御飛脚海陸無事着申候哉無心元存候、

然者⑨来丑年竹嶋松嶋へ弥貴様御舟御渡被成候筈市兵衛方と今度申談候、左様御心得年内方御支度可被成候、御仕合能帰朝之時分可預御左右候、将又⑩竹嶋杉桐之木御取寄大坂迄御届可被下候、大坂にて相良壹岐守殿蔵屋敷迄御届可被成候、彼御留主居衆源水仁兵衛殿・川原又兵衛殿と申仁兩人御座候、彼御方へ内々申遣置候、御断候ハ、無相違請取可被申候と存候、権八郎方へ二本程、我等も一本可申受候、遠路乍御六借■■■入候、此方ニ而珍敷木にて御座候間御無心申入候、壹岐守殿御屋鋪者今度村川市兵衛御存知にて御座候、少向御参府之時分可得御意候、恐惶謹言

十一月十六日

龜山庄左衛門（花押）

大屋九右衛門様 人々御中

尚々今度も村川と弥貴殿申談候、⑪明丑年ハ貴殿両嶋へ舟

御渡候筈仕候、兼而申渡候通少も相違無之候間、左様御心得可被成候、以上

(大谷家古文書二一二七／「阿倍一門」三四)

## (2) そのほかの史料について

このほか大谷家古文書中の松島渡海に関連する未翻刻・未紹介史料を以下に掲げて簡単に解説を付しておきたい。<sup>(8)</sup>

〔史料12〕 延宝六年（一六七八）以前

尚々⑤同姓瀬兵衛殿書状も不進候、御なつかしく候、互二年上候まゝ、御目二かゝり申ましきかと一入御なつかしく候、以上

八月五日之貴札拝見、先以⑥貴様御父子弥御堅固御勤仕候旨珍重存候、此表別条無御座、四郎五郎一家無為被罷在候、次拙者式も息災ニ勤候間可御心易候、御紙面則四郎五郎披見被申候、

一内々御無心申候物竹嶋ニ而御調被下大坂方橘屋清二郎相届御注文之通無相違相達、則別紙ニ請取手形進之候、

一⑦竹嶋松嶋両所江御船被遣無事帰朝日出珍重奉存候、此方ニ而も悦被申候、

一⑧此方方望之注文之内梅檀板壹枚乗物之棒拙者詠之桐木船中ニ而捨り申由残念之御事候、然共御船無何事日出度奉存候、

一大久保和泉守方江御状箱相届申候、此便俄故御返事跡と可進候、

一村川市兵衛殿御下首尾能被致御目見、早速御帰候、定而様子御間可被成と存候、其節も御報ニ申入候、相届可申と存候、猶期後音時候、恐惶謹言

十一月廿二日

亀山勝左衛門（花押）

大屋九右衛門様 御報

(大谷家古文書二一三一／「阿倍一門」四一)

右の「史料12」では傍線⑤に松島の名が見える。⑤⑥からすると宛先たる大谷九右衛門の父瀬兵衛（先代九右衛門の隠居名）が健在のようである。瀬兵衛は延宝七年（一六七九）九月三日に没したから、「史料12」は延宝六年以前のものとなる。⑧の既述は必ずしも松島のことは限らず、むしろ竹島（鬱陵島）渡海と関連する事項であるが、帰航途中で積荷を海中へ投棄せねばならなかった様子からすれば、渡海事業の不安定さを示すものである。

次に示す「史料13」「史料14」は、同じ六月二日付大谷九右衛門書状に対する阿倍政重「史料13」と亀山数右衛門「史料14」それぞれからの返信である。⑨⑩いずれも延宝七年（一六七九）九月三日のことだから、「史料13」「史料14」は延宝九年のものと分かる。したがって、この年に阿倍家家臣亀山左衛門の没した

ことが分かり①①、したがって「史料14」の差出者が代替わりをした亀山数右衛門となっている。「史料13」⑥・「史料14」④から、松島渡海もまた不安定であったことがうかがえる。④によれば「打続ヶ様ニ御不仕合嘸々御難儀」というのだから、松島での事業遂行は困難なことが常態化していたと見ても良いほどである。松島だけでなく竹島（鬱陵島）の収益もあがらなかった（④）から、今後は村川船と大谷船とによる隔年交代での渡海事業という従来 방식을改めて、一緒に渡航して収益を折半する方式への変更が模索されている（「史料13」①）。そして、同年中には具体化し、大谷・村川両家で確認書を取り交わされている（「史料15」）。

「史料13」延宝九年（二六八一）

尚々其方氣分本復候哉、渡海之船之事市兵衛と御相談、一所ニ可然候、此方用事候ハ、可申越候、①庄左衛門も相果、我等も別而不便ニ存候、以上

村川市兵衛参府付而、六月二日之芳札過分之至候、其方氣色悪在之付市兵衛同前ニ参府無之段、今程御本復候哉無心元候、市兵衛儀去廿八日首尾能御目見仕廻恐悦罷帰候間、様子可被申候、

一其方今度病氣付参府無之候而も不苦候、今少間を置参府可然候、其趣寺社奉行衆江申候趣市兵衛口上可被申候、

十七世紀竹島漁業史のために（池内）

一⑤同性瀬兵衛儀去々年九月三日ニ死去之由、曾而不存無音心外之至候、嘸悲歎力落ニ而可有之と存候、我等共も久々之知人故残念候、

一近年竹嶋の様子不宜旨市兵衛物語承之候、剩⑥松嶋渡海之船破損之儀笑止千万候、市兵衛儀も⑦近年両嶋共ニ所務無之難儀候由申候、此上者①其方市兵衛相談を以兩人一所ニ船遣、帰帆損得両方割付可然候、市兵衛とも令直談候、弥其方も其通被存候者右之通可被遂相談候、委細市兵衛申含候、且又我等儀も無恙在之候、猶期後音之時候、恐々謹言

八月二日 阿倍四郎五郎 政重（花押）

大屋九右衛門様 御返事

（大谷家古文書二二三／「阿倍一門」二三）

「史料14」延宝九年（二六八一）

尚々御氣色無御油断御保養可被成候、此方御用等も御座候ハ、可被仰聞候、不相易可得御意候、市兵衛殿ニも今度初而得御意候、此方之様子市兵衛殿へ御物語可被申候、以上  
今度村川市兵衛殿御越付同性庄左衛門方江六月二日之御札拜見、御紙面之趣四郎五郎為申聞候、先以貴様御事去四月頃方御氣分勝不申之由無御心許奉存候、依之此度御出無之旨御尤候、無御油断御保養可被成候、

一村川市兵衛首尾能御目見相済、所持無残所御仕舞御帰候、我

等共迄大慶存事、

一〔K〕御老父去々年九月三日御死去被成候由被仰下候、兎角可申述様無御座候、四郎五郎も御残多候由呉々被申出候、

一〔L〕同姓庄左衛門儀去二月初頃〆相煩、養生色々尽養保候得共可相叶、四月八日相果申、無是非仕合御察可被下候、御亡父御事御懷敷杯と常々被申出候得共貴様御事御代々之御近付ニ而御残多可被思召候、

一〔M〕松嶋渡海舟破損候様子別紙ニ御書付被下、則為見申候、打続々様ニ御不仕合嘸々御難儀ニ可有之候と市兵衛拙者共々御尊事被申出候、

一庄左衛門数年各様御慈志之段兼存候、此上不相易御心易可得御意、此方相応之御用向等も御座候ハ、可相弁候、四郎五郎方ちも委細以書状被申入候、猶以拙者ちも右之段可申進候由被申付候、猶期後音之時候、恐惶謹言

八月三日

龜山数右衛門 政親（花押）

大屋九右衛門様 御返事

（大谷家古文書二―三八／「阿倍一門」四二）

〔史料15〕天和元年（二六八一）

竹島渡海之所務打込相談相決候節、村川市兵衛より手前差越候一札于今所持申候付、為念此所ニ写置申候、

取替シ申一札之事

一当暮〆竹嶋松嶋自今以後寄合之所務ニ仕候、然上ハ此儀ニ付縦損亡在之候ても利分在之候ても兩人割符仕、右之算用少も無相違可致事、

一両嶋帛帆砌所務之品々少ニ而も無偽明白ニ可申相事、一両嶋仕出之算用、是又互ニ少ニ而も隠偽申間敷事、

右如一札之子共之代ニ至迄両嶋寄合ニ仕候、然上ハ互無延慮致相談、嶋仕出し入目互疑無之様ニ可仕候、尤損亡又ハ利分在之候節ハ猶以兩人割符無相違様ニ算用可申事、仍テ為後々年之一札如件、

天和元年西ノ十二月廿三日

村川市兵衛

大屋九右衛門殿

（大谷家古文書一―二五／「阿倍一門」四七）

## 二 「老中の内意」について

大谷家文書に含まれる書状原本および「阿倍一門」に筆録された書状を見る限り、その文中に「老中の内意」なる文言を含むものとしては前掲のものほかに次の一点「史料20傍線⑰」を得る。また、「史料20」と関連する文書として「史料16」～「史料19」を得られるから、まずは「史料16」～「史料20」について概観してそれらが一連のものであることを明らかにし、次いでここに現れる「老中の内意」なる文言の意味を述べることとしたい。

## 〔史料16〕

①正月八日別紙之御状令披見候、②去冬首尾能公方様御目見江難有被存候旨尤候、我等儀も弥無事在之事候、③来春竹嶋へ舟被相渡之旨、無事着岸之左右可承候、④材木之儀兩人へ之書状申達候、次重而者子息御目見ニ可被指越候由令承知候、一段可然候、無氣遣御越可有之候、猶期後音候、恐々謹言

正月晦日

阿倍四郎五郎 政重（花押）

大屋九郎右衛門様 御返報

（大谷家二二〇、「阿倍一門」二）

## 〔史料17〕

尚々為音問下緒大小式包贈給欣然之至候、以上

⑤正月八日連判之飛札令披見候、改年之吉慶雖事旧候珍重候、其表相替義無之何も無事越年之旨令満足候、我等義無恙罷在事候、然者⑥去冬大屋九右被申聞候趣市兵も同前二候由令承知候、⑦兩人談合之上勝手次第竹嶋へ舟渡海、材木伐可被申候、⑧不及申候得共、彼嶋材木なと取候付他所之者入込、以来脇へ訴詔人在之六ヶ敷事出来不申思案尤候、⑨委細者家来龜山庄左衛門方より可申達候、恐々謹言

正月晦日

阿倍四郎五郎 政重（花押）

村川市兵衛様

大屋九右衛門様

（大谷家二一九、「阿倍一門」九）

十七世紀竹島漁業史のために（池内）

## 〔史料18〕

⑩去八日之一輪令披見候、先以新曆之御慶雖事旧候、猶更不可有際限候、然者其表無別条貴殿堅固之由珍重候、如承意⑪去冬者御下久々ニ而遂向顔満足仕候、存之外早速帰国付而暇乞ニ以使も不申心外候、首尾能被致御目見へ恐悦之由尤存候、将又爰元一段御静謐、我等一類共堅固之事、随而⑫竹嶋材木之儀同名四郎五郎方江被申越由得其意候、猶期永日之時候、恐々謹言

正月廿七日

阿倍忠右衛門 正義（花押）

大屋九右衛門様 返事

（大谷家二一七、「阿倍一門」二六）

## 〔史料19〕

尚々⑬竹嶋へ材木取候義、委細ハ別紙申入候、以上

⑬去八日之御飛札令拝見候、如仰改年之御吉慶珍重候、弥御無事ニ御越年目出度候、拙者も無異儀越年申候、⑭去年ハ首尾能御目見早々相調、御帰府目出度候、重而御子息御越可被成候由得其意候、御馳走申候、⑮御書面四郎五郎初和泉守・忠右衛門・八郎右衛門二具ニ可申聞候、内々頼入候桐一本御取寄大坂迄御届ケ可被下候、我等用と御座候、猶期後音候、恐惶謹言

正月晦日

龜山庄左衛門（花押）

大屋九右衛門様 御報

（大谷家二二八、「阿倍一門」三六）



## 〔史料20〕

⑯去八日之御飛札拝見、如承意改年之御吉慶何方も珍重申納候、然者⑰竹嶋より材木御取被成度之段、則御老中様江四郎五郎得御内意候処、両人之者勝手次第材木相取可然之由御意之旨御座候、就夫⑱上方筋に剛者成もの害人彼嶋江遣之、山之様子見立させ可被成哉之由尤二候、併⑲両人に切米御出御やとい候てハ不苦候、⑳各同意にしないなと二御相談候て材木御取寄候ハ、以来竹嶋江運上指上ヶ渡海仕度なと、御公儀様江御訴詔申上義も可有之候、又者㉑材木取以後中ま出入杯出来、貴様方御両人公事之及沙汰、御公儀なとへ御出か之儀も可有之候、㉒然上者預ヶ置御六ヶ敷と被思召、彼嶋被召上候義も可有御座候、不及申候得共、以来出入無之様ニ御両人にて剛者成もの御やとい切、渡海可然存候、不可過御了簡候、右之段㉓拙者に念比ニ申越候様ニと四郎五郎被申付候、恐惶謹言

正月晦日

龜山庄左衛門 ■ (花押)

村川市兵衛様

大屋九右衛門様 御報

(大谷家二二二九、「阿倍一門」三七)

〔史料16〕く〔史料20〕の年代確定は困難だが、阿倍政重が遺跡を継ぐのが万治三年（一六六〇）十二月、龜山庄左衛門の没年月が延宝九年（一六八二）四月なので、その間の史料である。正月

八日付の大谷九右衛門書状①⑩⑬に対する阿倍政重〔史料16〕・阿倍正義〔史料18〕・龜山庄左衛門〔史料19〕それぞれからの返信、正月八日付の大谷九右衛門・村川市兵衛連署状⑤⑥に対する阿倍政重〔史料17〕・龜山庄左衛門〔史料20〕それぞれからの返信である。〔史料16〕②・〔史料18〕⑪・〔史料19〕⑭は同一の史実を指していると考えられるから〔史料16〕〔史料18〕〔史料19〕は同年正月の史料である。また〔史料16〕は正月八日付大谷書状を受けての大谷への返信だが、文中④に従えば、「材木の件については両人（大谷・村川）あて書状を送った」ということであり、この「両人あて書状」は〔史料17〕に該当する。〔史料20〕は〔史料17〕⑨を受けて返信されたものである（〔史料20〕⑲によれば、これは〔史料17〕を受けて返信されたものと分かる）。したがって、〔史料16〕く〔史料20〕の返信五通はすべて同年正月に作成されたものである。

大谷は来春竹島（鬱陵島）へ渡航予定である（〔史料16〕③）。

正月八日の大谷書状は、その折りに竹島（鬱陵島）で木材を伐採することについて阿倍家の意向を質したものであろう。それは阿倍政重（〔史料16〕④・阿倍忠義（〔史料18〕⑫）・龜山庄左衛門（〔史料19〕⑭）それぞれの大谷九右衛門あて返書の内容からも明らかである。そして、その件は、大谷家に対する返答だけでは全うしうる性質のものではなく、大谷・村川両家の合意が求められたものであった（〔史料17〕⑦、〔史料20〕⑰）。それは大谷・村

川連署の書状による問い合わせに対する返答だったからでもある。

大谷・村川連署の書面は、阿倍家に対してどのような問い合わせを行っていただろうか。

おそらくその書面には竹島（鬱陵島）での木材伐採事業を大谷・村川両家が合意して行いたいとの趣旨が書かれていたであろう（「史料17」⑥、「史料20」⑰冒頭部分）。そして伐採に際しては「上方筋<sup>5</sup>剛者成もの吉人彼嶋江遣之、山之様子見立させ可被成哉」（「史料20」⑱）というのが、大谷・村川側からすれば最も知りたかった（阿倍家の指示を得たかった）点であろう。恐らくはそれまでそうしたよそ者を雇い入れることは無かったからである。竹島（鬱陵島）渡海事業は、常に鳥取藩領米子周辺および隠岐国から労働力を調達して行ってきたからである。

竹島（鬱陵島）での材木伐採について、阿倍家からの返答・指示はそれを容認するというものであった。阿倍政重からは「兩人談合之上勝手次第」（「史料17」⑦）といい、亀山庄左衛門からは「御老中様江四郎五郎得御内意候処、兩人之者勝手次第材木相取可然之由御意之旨御座候」（「史料20」⑰）という。ただし条件が付されていた。

阿倍は、そうした伐採の場所へ「他所之者入込、以来脇方訴詔人在之六ヶ敷事出来不申思案尤候」（「史料17」⑧）と述べ、第三者による竹島（鬱陵島）渡海事業への介入を排除する点を厳しく

求めた。それをさらに敷衍させて述べたのが亀山である。

大谷・村川が柔軟に対応しようなどと相談して（しない〔「搦い」〕など二御相談）合意をし、大谷・村川以外のよそ者が竹島（鬱陵島）で伐採した木材を取り寄せるようなことをしたりしたら、この先、幕府に運上を提出して竹島（鬱陵島）渡海事業に参入したいなどと訴え出る者が新たに現れてくるかもしれない（「史料20」⑳）。あるいは、材木伐採ののちに共同で伐採を行っていたよそ者とのあいだでもめ事が起こり（「仲間出入」）、大谷・村川両家が公儀裁定の場に訴えられたりするような事態もありえないことではない（同㉑）。そうした事態に至れば、大谷・村川両家へ竹島（鬱陵島）を預けおくこともできないからといって、竹島渡海の特権が取り上げられてしまうかも知れない（同㉒前半）。だから、そうした紛議が生じないように、あらかじめ大谷・村川両家の方で「剛者成もの御やとい切」にし（同㉒後半）、見張りをさせることが肝要なのだ（同㉒）という。

さて、こうした文脈のなかで、亀山の発言のなかに「御老中様江四郎五郎得御内意候処、兩人之者勝手次第材木相取可然之由御意之旨御座候」（「史料20」⑰）なる文言が登場する。阿倍も亀山も竹島（鬱陵島）での木材伐採に際して第三者の介入を排除するよう求めているが、それは「老中の内意」の範囲を越えている。

阿倍が得たという「老中の内意」は、亀山書面の限りでは、大谷・村川両家が竹島（鬱陵島）で木材伐採することについて得

た内意であり、それ以上でも以下でもない。阿倍や亀山は竹島（鬱陵島）渡海事業への第三者の介入を排除せよと言うが、そうした強制力は「老中の内意」には含まれない。何となれば、大谷・村川の側が自ら「剛者成もの御やとい切」にし（『史料20』②後半）てそうした排除を実現すべきだと述べるからである。この「老中の内意」には、大谷・村川の特権を保護するだけの実力が備わらない。

そもそも竹島（鬱陵島）渡海事業が始められて以来、大谷・村川は折に触れて島から材木を切り出し、ときには造船まで行つて帰国した。それらに際して「老中の内意」を得た形跡は全く無い。『史料20』に見える「老中の内意」は、いったい如何なる効力を期待されて持ち出されているのだろうか。

繰り返しになるが、この木材伐採の件にかかわつては、大谷・村川両家に対し第三者の介入を排除するよう阿倍家側は求めている。その排除を確実に行わなければ、大谷・村川の手元から竹島（鬱陵島）渡海の利権が没収されるとまで述べた上での要請である。もし「老中の内意」が幕府権力を背後にもつようなものであったならば、第三者の排除を行うような実力は「老中の内意」のなかに含まれるはずである。しかしここでは第三者の排除は大谷・村川両家の側に強いられる。この史料に見える「老中の内意」にはそうした強制力が随伴されていないということである。そして、「老中の内意」は阿倍政重書状には現れず、亀山庄左衛

門の書状にのみ現れる。また、「老中の内意」といいながら老中の名前が具体的に示されないのも、実態が伴わないことの証左である。

これらからすれば、現実には「老中の内意」なる実態は存在せず、阿倍家の意向を大谷・村川両家に強制させるために亀山庄左衛門が持ち出してきた権威づけに過ぎないのである。『史料8』⑤に現れる「老中の内意」もまた亀山庄左衛門の書状中にのみ現れる。これも同様に架空の作為に過ぎない。

## おわりに

竹島（鬱陵島）渡海事業も松島（今日の竹島）渡海事業も、大谷家と村川家そして阿倍家の三者が緊密に結び合いながら実現され、その利権が享受されてきたものであった。阿倍家の側からすれば、そうした利権が第三者に侵されないように細心の注意を払う必要がある、そのために大谷家や村川家ないしは両家ともどもに対して強力な指導を行った。その際の権威付けに利用されたのが「老中の内意」なる架空の作為であった。

近時、この「老中の内意」を歴史的事実と勘違いをした論を立てる者がある。松島（今日の竹島）渡海にも幕府の許諾・公認のあったことを是が非でも論じたい気持ちに先に立つのである。しかしながら、史実は史料から組み立てねばならないのである。

本稿は、そのためにいささか煩雑ながら未紹介史料等々を翻刻紹介してみたものである。

# 「付記」

二〇一九年一月十五日、島根県は大谷家文書五五三点の寄贈を受けたとの報道発表を行い、翌十六日の新聞各紙（筆者が確認したのは、山陰中央新報、中国新聞、日本海新聞、京都新聞および読売新聞）が記事にした。大谷家文書が散逸することなく、一括して公的機関のもとで保管されることとなったのは、まことに喜ばしく思う。筆者が大谷家で文書調査をさせていただいたおりに、これら古文書類は仏壇の最下段に複数の小さな木箱等に分けて保管されていた。筆者は、それぞれの家に伝来する貴重な古文書等については、保存・管理・継承が可能である限りは当該の家で受け継がれるのが最も良いと考えてきた。大谷家文書についても、大谷家のもとで受け継いで行かれる方がよいことを、大谷家十五代武廣氏夫人および十六代和広氏ともそのようにお話をした（当時十五代武廣氏は病気で入院中であつた）。

筆者の調査は『新鳥取県史』西伯耆編という史料編の編纂にかかわるものであつたが、一方で当時すでに竹島問題にかかわる専門書『竹島問題とは何か』をもっており、和広氏に拙著を献呈した上でこの問題に対する卑見を申し述べもした。和広氏は古文書のほかに大谷家に伝来する品々を見せにくださりながら、「大谷家文書」の存在によって竹島が日本領として証明されてきたことを誇りに思う」と述べた。それに対して筆者は、「拙著の考察を踏まえれば、大谷家文書の内容を読み解くと却って竹島は日本領だとは言いが切れないことも明らかになる」と申し上げた。それについては不満げな表情や反論はなく、「歴史研究は専門ではないので、先生の判断で存分到大谷家文書を検討してください」とのお話を頂戴した。そうした十六代のお勧めにしたがって大谷家文書の悉皆調査を行い、デジタルカメラで撮影を完了し、おおよそのところでは大谷家文書の全体像を把握した。もちろん全点にわたって翻刻を済ませたわけでもなければ、読み込み済みというわけ

でもない。けれども、おそらく大谷家文書の子細な検討によって明らかにするのは、この文書に依拠して竹島が日本領であることを論じてきた川上健三の仕事の空虚さであり、竹島は遅くとも十七世紀末には日本領ではなかった事実である。

大谷家文書を竹島問題に従属させるのはたいへん視野が狭い。大谷家文書から明らかにするのは鳥取藩領民の生業の具体的なすがたである。その文書群は、十七世紀から十九世紀に至る時期の鳥取藩領民の生きざまを豊かに描きうる貴重なものだと思える。それなのに、今回の大谷家文書の島根県への寄贈が、それであつたかも知れない竹島問題で日本が有利になるかのごとく一辺倒の報道がなされていたのは、まことに残念な次第である。

## 注

- (1) 池内敏『大君外交と「武威」』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）、同『竹島問題とは何か』（名古屋大学出版会、二〇一二年）、同『竹島領有権の歴史的事実にかかわる日本政府見解について』（『日本史研究』六二二、二〇一四年）、同『竹島は日本固有の領土である』論（『歴史評論』七八五、二〇一五年）、同『国境』未満（『日本史研究』六三〇、二〇一五年）、同『竹島 もうひとつの日韓関係史』（中公新書、二〇一六年）

- (2) 池内敏「日本外務省による大谷家文書調査」（『名古屋大学附属図書館研究開発年報』一三、二〇一六年、<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/hbvr/report/report.html>）

- (3) 『新鳥取県史』第二巻・近世編（鳥取市、一九八八年）三三三～三三八頁。

- (4) 後掲「史料2」は万治元年に比定されることが確かだが、ここにも「道喜老」なる人名が登場する。したがって代替わり前から四代めは「道喜」を名乗っていたとする田村の推測もあながち間違ではない。さも

なくば、代替わりを万治二年とする通説的理解を改めて、その期日を遡らせるかである。

- (5) 『東都阿倍御一門御書写』(大谷家古文書五一二五)は、文化十五年(一八一八)に大谷家当主によつて当時大谷家の手元に残されていた旗本阿部家一門からの書状を筆写したものである。ここに採録された書状の原本はすべて現在も伝来するが、ところどころに紙の擦れ等で読解不能な部分があり、この冊子の筆録が良い参照となる。以下、この冊子の何通めの史料として収録されているかを同様な形式で付記する。

- (6) 大谷家古文書二一一七に次の史料「史料3・付」があるが、「阿倍一門」では「史料3」に附属するかたちで納められており、日付・内容からすれば元々は「史料3」とともに一括されていたものと想定される。

〔史料3・付〕

追而鯉節百贈給御志過分之至候、寔去比ハ永々在江戸之処何之馳走不申残念候、以上

六月廿一日

阿倍四郎五郎

大屋九右衛門様

- (7) 阿部正継は正保四年(一六四七)に遺跡を継ぎ、万治三年(一六六〇)没。

- (8) 本文中に掲げなかった史料で、史料中に松島なる名が現れる未紹介・未翻刻史料に次の史料がある。

村川市兵衛罷下候付而三月廿八日之書状令披見候、其表相替義無之、竹嶋松嶋之船無恙到来之由一段之儀候、然者扇子三本入沓箱贈給令満足候、将又重而ハ御手前為名代子息可被差越由得其意候、随而我等一類共堅固罷在事候、猶期後音之時候、恐々謹言

五月廿一日

阿倍忠右衛門

大屋九右衛門様 返報

(大谷家古文書二一四)

キーワード…竹島、松島、大谷家文書



**Abstract**

## Reconstruction of the history of Takeshima fishery

IKEUCHI Satoshi

The Ministry of Foreign Affairs of Japan believes that Takeshima is a part of Japanese territory. This belief has been derived from a series of works by Kawakami Kenzo, which came to fruition in “A Historical and Geographical Study of Takeshima (1966).” Kenzo’s argument concerning the Edo period was founded on an investigation of the historical archives of the Oya family’s documents which was not opened to the public before. This paper try to reconstruct the historical image that Kawakami kenzo made, by using Oya family’s documents.

Keywords: Takeshima (竹島), Matsushima (松島), Oya family documents (大谷家文書)